

『後山詩話』 訳注稿 (四)

北宋・陳師道 著

青木沙弥香・竹澤英輝・許山秀樹
松尾肇子・三野豊浩・矢田博士 訳注

〔解題〕

前号に続いて、北宋・陳師道の『後山詩話』の訳注稿である。本号には、全八十四節のうち、第七十一節から第八十四節までを掲げ、本訳注稿を終えることにする。なお、最後に当たり、『附録一』として『四庫全書総目提要』の解題を、『附録二』として「後山詩話諸本異同」を末尾に附した。

〔凡例〕

- ◇ テキストは、清・何文煥輯『歷代詩話』（中華書局、一九八一年四月第一版）を底本とした。
- ◇ 底本で校異が示されている部分については、原文に〔校一〕、〔校二〕……と付してその箇所を示し、【校異】の項目を設けて訳出した。

◇ 【訓読】の項目の書き下し文については、漢字の読み（ルビ）は現代仮名遣いを、送り仮名は旧仮名遣いを用いた。

七十一

裕陵常謂杜子美詩云、「助業頻看鏡、行藏獨倚樓」。
謂甫之詩、皆不迨此。

【訓読】

裕陵 常に杜子美の詩に、「助業 頻りに鏡を看、行藏 独り楼に倚る」と云ふを謂ふ。謂へらく甫の詩、皆な此れに迨ばず、と。

【語釈】

*裕陵：北宋の神宗のこと。死後、永裕陵に葬られたので、そう呼ばれる。

*「勳業」の二句：唐・杜甫の五言律詩「江上」詩の頸聯。

*「勳業」の句：鏡に映し出される年老いた顔をしきりに眺めては、何ら勳功をあげていない我が身の不甲斐なさを思う、ということ詠っている。「勳業」は、勳功、業績、の意。

*「行藏」の句：独りで楼閣の手すりにもたれかかり、我が身の出処進退を思う、ということ詠っている。「行藏」は、世に用いられば道を行き、用いられなければ民間に蔵れること。出処進退を言う。

【通釈】

北宋の神宗は、杜甫の詩に「何ら勳功をあげることがなかったことを思いつつ、鏡に映し出される年老いた我が顔を頻りに見つめ、我が身の出処進退を思いつつ、独り楼閣の手すりにもたれかかる」とあるのをいつも口にされていた。私が思うに、杜甫のほかの詩は、いずれもこの詩には及ばない、と。

七十二

呂某公歸老於洛。嘗遊龍門還、闈者執筆、歷請官稱。公題以詩云、「思山乘興看山回、烏帽綸巾入帝臺。門吏不須詢姓氏、也曾三到鳳池來」。

【訓読】

呂某公 洛に帰老す。嘗て龍門に遊びて還るに、闈者筆を執り、歴く官稱を請ふ。公 題するに詩を以てして云ふ、「山を思ひて興に乗じ 山を見て回る。烏帽 綸巾 帝台に入る。門吏 須ひざれ 姓氏を詢ふを。也た皆て三たび鳳池に到りて来たる」と。

【語釈】

*呂某公：姓が呂という以外、名や伝記については未詳。

*歸老：官を辞めて老後を過ごすこと。

*龍門：洛陽市の南にある岩山の名。石窟があることで知られる。

*闈者：「門吏」に同じ。宮殿の門を守る役人。

*歴：次々に、一つ一つ、の意。

*官稱：官職と名称。

*烏帽綸巾：黒い帽子と青い絹糸の組みひもで作った頭巾。いずれも道士の服装を表す。

*帝臺：天子の居る宮殿。

*不須：～する必要はない、の意。

*三到鳳池來：「鳳池」は、宮中の庭園にある池の名。そばに中書省があった。「三」は、「三度」または「しばしば、何度も」の意。「到鳳池來」は、中書省に勤務することを象徴する。ここでは、呂某がかつて何度も中書省勤務を経験したことを言う。ちなみに、【備考】に挙げた張士遜の場合の「三至鳳池來」の「三」は、その経歴から「三度」と回数が特定できるようである。

【通釈】

呂某という人が年老いたため官を辞して洛陽に隱居

した。あるとき龍門に出かけて帰ってきたところ、宮殿の門番が筆を手に取り、官職と名前を答えるよう一つ一つ求めた。そこで呂公は詩を書き付けて次のように言った。「山を見たいと思ひ興に乗じて行き、山を見て帰ってきたのだ。道士のような服装で宮殿の門をくぐろうとしただけのこと。門番よ、私の名を尋ねる必要はないのだよ。この私も以前は何度も鳳池のそばの中書省に勤めたことがあるのだから」と。

【備考】

南宋・王鞏の『聞見近録』には、北宋・張士遜の逸話が収められており、その内容が本節と極めて類似する。張士遜は、字を順之と言う。仁宗の天聖六年（一〇二八）、明道元年（一〇三二）、宝元元年（一〇三八）に、三たび同中書門下平章事に任命された。康定元年（一〇四〇）、太傅の官職で致仕した。皇祐元年（一〇四九）に八十六歳で卒し、文懿と諡された。以下、参考までに「原文」と「訓読」を掲げる。

張文懿既致政、而安健如少年。一日西京看花回。道帽道服、乘馬張蓋、以女樂從。入鄭門、監門官不之識也。且禁其張蓋。以門籍請書其職位。文懿以小詩大書其紙末云、「門吏不須相怪問、身曾三至鳳池來」。監門官即以詩進仁宗。遣中使錫以酒餼問勞。

〔張文懿 既に致政し、而れども安健なること少年の如し。一日西京にて花を看て回る。道帽道服にして、馬に乗り蓋を張り、女樂を以て従はしむ。鄭門に入るに、監門の官之を識らざるなり。且つ其の蓋を張るを禁ず。門籍を以て其の職位を書せんことを請ふ。文懿 小詩を以て其の紙の末に大書して云ふ、「門吏 須ひざれ相

ひ怪しみて問ふを、身は曾て三たび鳳池に至りて來たる」と。監門の官 即ち詩を以て仁宗に進む。中使をして錫るに酒餼（酒と生肉）を以てし勞を問はしむ。〕

七十三

曹南院爲秦帥、唵氏舉國入寇。公自出禦之。戰于三都谷、大敗之、唵氏遂衰。其幕府獻詩云、「賢守新成蓋代功、臨危方始見英雄。三都谷路全帥入、十萬胡塵一戰空。殺氣尚疑橫塞外、捷音相繼遍寰中。君王看降如綸命、旌節前驅馬首紅」。

【訓読】

曹南院 秦の帥たりしとき、唵氏 国を挙げて入寇す。公 自ら出でて之を禦ぐ。三都谷に戦ひて、大いに之を敗り、唵氏 遂に衰ふ。其の幕府 詩を献じて云ふ、「賢守 新たに成す 代を蓋ふの功。危きに臨み 方に始めて英雄 見はる。三都谷路に 全帥 入り、十萬の胡塵一戦にして空し。殺氣 尚ほ疑ふらくは 塞外に横たはるか。捷音 相ひ継ぎ 寰中に遍し。君王は看る 降ること綸命の如きを。旌節 前駆して 馬首に紅なり」と。

【語釈】

*曹南院：北宋・曹瑋のこと。真宗の時の人。かつて宣徽南院使の官に就いていたので、そう称される。

*秦帥：「帥」は、安撫使の別名。地方の兵権をつかさどる。多くは州知事が兼任した。「秦」は、陝西省あたりの地を指す。『宋史』巻二

五八「曹瑋伝」によれば、曹瑋は、秦州の知事に就任した時、涇・原・儀・渭・鎮戎縁辺の安撫使を兼ねたと言う。

*隴氏：青海省あたりの拠点とするチベット系の異民族。

*三都谷：甘肅省天水市の西。渭水の支流である散渡河の流域一帯の地。『宋史』巻二五八「曹瑋伝」によれば、隴厮羅が数万の大軍を率いて攻め入ってきたのを、曹瑋が三都谷で迎え撃つたと言う。

*蓋代功：世に並ぶ者がいないほどの功績。

*全師：全ての軍。

*方始：ここではじめて、の意。

*殺氣：戦乱が起こりそうな不穏な気配。

*塞外：国境の向こう側。

*捷音：戦勝の知らせ。

*寰中：全土、の意。

*「君王」の二句：「綸命」は、天子の詔。「旌節」は、安撫使に授けられる旗じるし。紅色を基調とする。ここでは、詔に応じるかのように敵が降伏し、馬の頭のあたりに赤い旗をはためかせながら凱旋する曹瑋の雄姿を、天子が御覧になることを言うのであろう。

【通釈】

曹瑋が秦の地方の兵権を統括する安撫使であったとき、隴氏が国を挙げて攻め入ってきた。曹瑋は自ら出陣しこれを防いだ。三都谷で戦って、大いにこれを敗り、

隴氏はかくして衰退した。その幕僚が詩を献上して、次のように讃えた。「すぐれた長官が今ここに世に並ぶ者がいないほどの大きな手柄を立てられた。危機に臨んでこそはじめて英雄は現れるのだ。三都谷の道には全ての軍が押し入り、十万のえびすどもは一戦を交えただけで一掃された。なおも不穏な気配は国境の向こう側に横たわっているようではあるが、戦勝の知らせが次々と届き我が国全土に知れ渡る。君王は、詔に応じるかのように敵が降伏するのを御覧になり、馬の頭のあたりに赤い旗をはためかせながら、あなたは凱旋なさるのだ」と。

七十四

太祖夜幸後池、對新月置酒。問「當直學士爲誰」、曰「盧多遜」。召使賦詩。請韻、曰「些子兒」。其詩云、「太液池邊看月時、好風吹動萬年枝。誰家玉匣開新鏡、露出清光此子兒」。太祖大喜、盡以坐間飲食器賜之。

【訓読】

太祖 夜 後池に幸し、新月に対して置酒す。「当直の学士は誰たるか」と問ふに、曰く「盧多遜なり」と。召

して詩を賦せしむ。韻を請ふに、曰く「此子兒なり」と。其の詩に云ふ、「太液池辺 月を看るの時、好風 吹き動かす 万年の枝。誰が家の玉匣ぞ 新鏡を開く。清光を露出すること此子兒なり」と。太祖 大いに喜び、尽く坐間の飲食の器を以て之に賜ふ。

【語釈】

*後池：宮中の御苑にある太液池を言う。

*新月：出たばかりの月。

*置酒：酒宴を催すこと。

*學士：翰林學士のこと。皇帝の側に仕え、詔勅の起草などを職務とする。

*盧多遜：五代末から北宋初期にかけての人。北宋・太祖の時に翰林學士、中書舍人、參知政事などを歴任し、太宗の時に中書侍郎、平章事に拝せられた。

*此子兒：少し、の意。ここでは、韻の指定を求めた「盧多遜」の名が、「多孫（子孫が多い）」に通じることから、戯れに「少しばかりの子ども」の意とも取れる。「此子兒」を句末に用いて詩を作るよう命じたのであろう。

*「太液」の詩：『全宋詩』卷十三には、本節を出典とし、「新月應制」の題で収められている。

*「好風」の句：「萬年」は、木の名。冬青木。モチの木。同じく宿直の様子を詠った南朝齊・謝朓の「直中書省」詩にも、——風動萬年枝、日華承露掌。（風は動かす 万年の枝、日は華やかかなり 承露の掌。——とあり、劉良の注に「萬年、木名。〔万年は、木の名なり〕」とある（『文選』卷三十）。盧多遜の句は、謝朓の句を踏まえていよう。

*玉匣：鏡を入れる箱。

*露出清光此子兒：清らかな光がわずかに漏れ出ていること。出たばかりの月の光の様子を、箱の中からわずかに漏れ出る鏡の光にたとえる。ここでは、太祖が天下を統一して宋朝を開き、これから明るく新しい治世が始まることを頌えていよう。

【通釈】

太祖が夜、太液池に行幸し、出たばかりの月を愛でながら酒宴を催された。「今日の宿直の學士は誰であるか」と質問されたところ、「盧多遜です」と答えた。そこで呼び寄せて詩を作らせることにした。盧多遜が韻を求めたところ、「此子兒がよい」とお答えになった。その詩に次のように言う。「太液池のほとりで月を眺めていると、心地よい風が万年という名の木の枝を吹き動かす。いったい誰であろうか、美しい箱を開けて新しい鏡を取り出したのは。清らかな光がわずかに漏れ出ている」と。太祖は大いにその詩を気に入り、宴席に並べてあつた飲食器を全て彼に褒美としてお与えになった。

七十五

韓魏公爲陝西安撫、開府長安。李待制師中過之。李有詩名、席間使爲官妓賈愛卿賦詩。云、「願得貔貅十

萬兵、犬戎巢穴一時平。歸來不用封侯印、只問君王乞愛卿。」

【訓読】

韓魏公 陝西の安撫と為り、府を長安に開く。李待制師中 之に過ぎる。李に詩名有り、席間 官妓の賈愛卿の為に詩を賦せしむ。云ふ、「願はくは貔貅ひきゅう十万の兵を得て、犬戎けんじゅうの巢穴 一時にして平らげんことを。帰り来たれば 封侯の印を用ひず、只だ君王に問ひて愛卿を乞はんのみ」と。

【語釈】

- * 韓魏公：北宋・韓琦のこと。字は稚圭。仁宗の天聖五年（一〇二七）の進士。宝元年間の初め、西夏の侵入を防ぐため、陝西の安撫使に任じられた。その後、樞密使、宰相職の同中書門下平章事などを歴任。魏国公に封ぜられた。
- * 安撫：地方の兵権をつかさどる安撫使という官職。
- * 李待制師中：北宋・李師中のこと。字は誠之。神宗の熙寧年間の初めに、天章閣待制に抜擢された。その後、西夏の侵略にあたり、秦鳳路経略安撫使・秦州の知事に改められた（第八十二節を参照）。
- * 官妓：官營の妓女。
- * 貔貅：虎や熊に似た獣。ここでは、勇猛な兵士を喩える。
- * 犬戎：かつて陝西の地を中心に栄えた西周王朝を滅ぼした異民族の名。ここでは、西夏を喩える。
- * 封侯印：諸侯とすることを認める印章。異民族を破った功績に対する

恩賞として与えられることが多い。

【通釈】

韓琦は、陝西の安撫使となり、長安に幕府を開いた。天章閣待制の李師中がそこに立ち寄った。李師中は詩で有名であったので、宴席に侍っていた人々が官妓の賈愛卿のために詩を作るよう命じた。そこで李師中は次のような詩を作った。「願わくば勇猛な十万の兵士を引き連れて、えびすどもの巢穴を一瞬にして平らげてやりたいものだ。帰還したならば、諸侯のしるしなどいらぬ。ただ皇帝陛下に愛卿を頂きたいとお願いするだけだ」と。

七十六

某守與客行林下、曰「柏花十字裂」。顧客對。其倅晚食菱、方得對云、「菱角兩頭尖」。皆俗諺全語也。

【訓読】

某守 客と林下に行きて、曰く「柏花 十字に裂く」と。客の對せんことを願ふ。其の倅 晩に菱を食らひ、方めて對を得て云ふ、「菱角 両頭に尖る」と。皆な俗諺の全語なり。

【語釈】

* 柏花：「柏」は、ブナ科の常緑針葉樹。コノテガシワ。「柏」は、「百」と音通で、「十」の字と数字に関する言葉遊びとなっている。

* 倅：州郡の副長官。

* 菱角：「菱角」は、菱の実。ここも「柏花」の句と同様、「菱」が「零」と音通で、「兩」の字と数字に関する言葉遊びとなっている。

* 俗諺：世間で言われている諺。

* 全語：そっくりそのままの語、の意。

【通釈】

ある長官が客人と林の下を歩いて、次のように言った。「柏の花が十の字の形に裂けている」と。そして客人に對となる句を作るよう求めた。副長官であつた者が暮に菱を食べ、そこではじめて對となる句が思い浮かんだ。その句に言う。「菱の実は両端が尖っている」と。いずれの句も、民間の諺の語をそっくりそのまま用いたものである。

七十七

杭妓胡楚龍靚、皆有詩名。胡云、「不見當時丁令威、年來處處是相思」（校）。若將此恨同芳草、卻恐青青有盡時」。

張子野老子杭、多爲官妓作詞。與胡而不及靚、靚獻詩云、「天與羣芳十樣葩、獨分顏色不堪誇。牡丹芍藥

人題徧、自身如鼓子花」。子野于是爲作詞也。

【校異】

校一：「年來」は、もと「年年」に作る。適園本によつて改める。

校二：「與胡」は、もと脱落していた。適園本によつて補う。

【訓読】

杭の妓の胡楚・龍靚、皆な詩名有り。胡云ふ、「當時の丁令威を見ず、年來 処処 是れ相ひ思ふ。若し此の恨みを將つて芳草に同じくすれば、却に恐る 青青 尽くる時有るを」と。

張子野 杭に老い、官妓の爲に詞を作ること多し。胡に与ふるも靚に及ばず。靚 詩を獻じて云ふ、「天は群芳に十様の葩を与ふ。独り顏色を分たるるも誇るに堪へず。牡丹 芍薬 人の題すること徧し。自ら分とす 身は鼓子の花の如し」と。子野 是こに于いて爲に詞を作るなり。

【語釈】

* 丁令威：漢代の人。仙術を学んで鶴となり天に昇つたと言う。

* 此恨：ここでは、不老不死の仙人とは違つて、年老いていくことを避けられない妓女の無念な思いを言う。また、好きな男と添い遂げる事が出来ない嘆きを言う。

* 卻：ここでは、まさに、あたかもちようど、の意。

* 張子野：北宋・張先のこと。子野はその字。仁宗の天聖八年（一〇三〇）

の進士。詞の作者として知られ、柳永と並び称された。

*羣芳：多くの植物。

*葩：花のこと。

*獨分顔色：「獨」は、ただひっそりと、の意。「分」は、分け与える、

の意で、平声で読む。「顔色」は、色、の意。ここでは、花の色と容貌とを掛けている。ただひっそりと控えめに色を分け与えられていることを言う。

*不堪：「不可」に同じ。できない、の意。

*自分：自分自身わきまえる、の意。「分」は、本分とする、の意で、去声で読む。

*鼓子花：ひるがおのこと。

【通釈】

杭州の妓女の胡楚と龍靚は、いずれも詩で名が知られていた。胡楚の詩に次のように言う。「漢の当時の丁令威の姿を目にしなくなりました。いつでもどこでも心に思っています。もしこの思いを香り草にたとえるならば、青々と茂る草もいつかはつきてしまうのだろうと不安なのです」と。

張先は杭州で老後を過ごし、官妓のために詞を作つてやる機会が多かった。胡楚には与えたが、龍靚には与えてやらなかった。そこで龍靚は詩を差し上げて言った。「天は多くの植物にさまざまな花をお与えになりましたが、私は誇るに足るだけの色を分け与えられませんでし

た。ボタンやシャクヤクは大勢の人々が詩に書き付けてくれますが、私はこの身をヒルガオのようなものだと自らわきまえております」と。子野はそこで龍靚のためにも詞を作つてやつた。

七十八

王岐公詩喜用金玉珠璧、以爲富貴。而其兄謂之至寶

丹。

【訓読】

王岐公 詩に喜みて金玉珠璧を用ひて、以て富貴と爲す。而して其の兄 之を至宝丹と謂ふ。

【語釈】

*王岐公：北宋・王珪のこと。字は禹玉。仁宗の慶曆二年（一〇四二）の進士。神宗の熙寧年間に宰相職である参知政事、同中書門下平章事を歴任。後に岐国公に封ぜられた。

*至宝丹：薬の名。多くの種類の貴重な薬物を配合して作られる。

【通釈】

王岐公は好んで金玉や珠璧などの宝物を詩に詠み込み、それを富貴なものと思つていた。そして、その兄はその詩を評して「至宝丹」と言った。

七十九

閩士有好詩者、不用陳語常談。寫投梅聖俞。答書曰、「子詩誠工、但未能以故爲新、以俗爲雅爾」。

【訓読】

閩の士に詩を好む者有り、陳語常談を用ひず。写して梅聖俞に投ず。書に答えて曰く、「子の詩 誠に工なるも、但だ未だ故を以て新と爲し、俗を以て雅と爲す能はざるのみ」と。

【語釈】

* 閩：福建省の旧称。
* 陳語常談：言い古された言葉や日常よく使われる語。
* 梅聖俞：梅堯臣のこと。聖俞はその字。西崑体に見られる、修辭に凝り言葉が難解な詩体に反対し、「平淡」な詩を作ることを主張した。

【通釈】

閩の人で詩を好む者がおり、古めかしい言葉や日常よく使われる語を用いなかった。あるとき手紙を書いて（詩とともに）梅堯臣に寄せた。梅堯臣は、その手紙に答えて次のように言った。「貴君の詩はまことに巧妙ですが、ただ、陳腐な言葉を新鮮なものに変え、平俗な言葉を典雅なものに変えることがまだお出来にならないようです」と。

八十

蘇公居穎、春夜對月。王夫人曰、「春月可喜。秋月使人愁耳」。公謂前未及也。遂作詞曰、「不似秋光、只與離人照斷腸」。老杜云、「秋月解傷神」。語簡而益工也。

【訓読】

蘇公 穎に居りしとき、春夜 月に對す。王夫人曰く、「春月は喜ぶべし。秋月は人をして愁へしむるのみ」と。公 謂へらく、前のひと未だ及ばざるなりと。遂に詞を作りて曰く、「似ず 秋光の、只だ離人の与に斷腸を照らすに」と。老杜云ふ、「秋月 解く神を傷ましむ」と。語は簡にして益ます工なり。

【語釈】

* 蘇公：蘇軾のこと。
* 穎：地名。今の河南省登封県の東。蘇軾は元祐六年（一〇九二）八月から翌年二月まで、知事としてこの地に赴任した。
* 前未及也：月に対する王夫人のような発想を、これまでの詩人で思い至った人はまだいない、ということ。
* 「不似」の二句：蘇軾の「減字木蘭花」詞の一節。北宋・趙令時（字は德麟）の『侯鯖録』に、以下のような類似の逸話が見られる。――元祐七年正月、東坡在汝陰。州堂前梅花大開、月色鮮霽。王夫人曰、「春月色勝如秋月色。秋月令人悽慘、春月令人和悅。何如召趙德麟輩

來、飲此花下」。先生大喜曰、「吾不知子亦能詩耶。此真詩家語耳」。

遂召德麟飲。「元祐七年正月、東坡 汝陰に在り。州の堂前の梅花 大いに開き、月色 鮮かに霽る。王夫人曰く、「春月の色は秋月の色に勝る。秋月は人をして凄惨たらしむるも、春月は人をして和悦ならしむ。何如、趙德麟の輩を召して来たらしめ、此の花下に飲まん」と。先生 大いに喜びて曰く、「吾れ知らず、子も亦た詩を能くするか。此れ真に詩家の語なるのみ」と。遂に德麟を召して飲む」。——

これによれば、蘇軾の詞は、元祐七年正月の作ということになる。また、詞牌の下に以下のような小題が付されたテキストもある。

——二月十五日夜、與趙德麟小酌聚星堂。「二月十五日夜、趙德麟と聚星堂に小酌す」。——

*「秋月」の句：杜甫の五言古詩「贈王二十四侍御契四十韻」詩の一節。

【通釈】

蘇軾が頷にいたころ、ある春の夜に月を眺めた。王夫人が言うには、「春の月は心を楽しませます。でも秋の月はただ人を悲しませるだけです」と。蘇軾は、これまでの詩人で月についてこのように捉えた人はまだいないのではないか、と思った。そこで詞を作つて次のように詠つた。「春の月は、離別の悲しみに腸を断たれんばかりの人をただ照らし出す、秋の月には似ていない」と。ところが杜甫の詩に、「秋の月は実に人の心を痛ませる」と言う。言葉は簡潔でありながらもますます巧みである。

八十一

余登多景樓、南望丹徒。有大白鳥飛近青林。而得句云、「白鳥過林分外明」。謝朓亦云、「黃鳥度青枝」。語巧而弱。老杜云、「白鳥去邊明」。語少而意廣。

余每還里、而每覺老。復得句云、「坐下漸人多」。而杜云、「坐深鄉里敬」。而語益工。乃知杜詩無不有也。

【訓読】

余 多景樓に登り、南のかた丹徒を望む。大なる白鳥の飛びて青林に近づく有り。而して句を得て云ふ、「白鳥林を過ぎて 分外に明らかなり」と。謝朓も亦た云ふ、「黃鳥 青枝を度る」と。語は巧みなるも弱し。老杜云ふ、「白鳥の去りし^{あたり}辺は明るし」と。語は少なきも意は広し。余 里に還る毎に、而して毎に^{つね}老いを覚ゆ。復た句を得て云ふ、「坐下 漸く人 多し」と。而して杜云ふ、「坐深くして 郷里 敬ふ」と。而して語は益ます^{たくみ}工なり。乃ち杜詩の有らざる無きを知るなり。

【語釈】

*多景樓：江蘇省鎮江市の北固山の甘露寺にある樓。宋代になって、那守の陳天麟が唐代の臨江亭の跡地に建てた。

*丹徒：江蘇省丹徒県。鎮江市の南に位置する。

*「白鳥過林分外明」の句：『全宋詩』卷一一二〇に「句」として収められており、南宋・史彌堅の『嘉定鎮江志』を出典とする。「分外」は、とりわけ、の意。

*「黃鳥度青枝」の句：『後山詩話』では、この句を南朝齊・謝朓の句としていて、『樂府詩集』卷四十三「玉階怨」では、謝朓の次に配列されている南朝齊・虞炎の詩に見える。また、『玉臺新詠』卷十では、やはり虞炎の「有所思」詩（注に「一に玉階怨に作る」とある）に見える。

*「白鳥去邊明」の句：杜甫の五言律詩「雨四首」其一の領聯に見える。「紫崖奔處黑（紫崖 奔る処 黒し）」の句と対句をなす。

*「坐下漸人多」の句：未詳。

*「坐深鄉里敬」の句：杜甫の五言古詩「壯遊」詩の一節。老いるとともに座る場所が部屋奥の上座になることを詠う。なお、『杜詩詳注』卷十六は、「郷里」を「郷黨」に作る。

【通釈】

私は多景楼に登り、南を向いて丹徒の街を眺めた。すると大きな白い鳥が飛んできて、青々と茂る林に近づいてきた。それを見て次のような句が思い浮かんだ。「白い鳥が青い林を通り過ぎ、その白さがことのほかはつきりと見える」と。謝朓もまた次のように詠っている。「黄色い鳥が葉の青く茂る枝を渡る」と。言葉は巧みだが訴える力が弱い。杜甫の詩に次のように詠う。「白い鳥が飛び去るあたりは明るく見える」と。言葉は少ないが言おう

としている意味は深い。

私は郷里に帰るごとに、つねに老いを感じる。そこでまた次の一句が思い浮かんだ。「私より下座に座る人がしだいに多くなってきた」と。ところが、杜甫の詩に次のように詠う。「私の座る場所は部屋奥の上座となり、郷里の人々が敬ってくれる」と。言葉はますます巧みである。私はそこではじめて杜甫の詩には詠われていないものがないことを知ったのである。

八十二

周盤龍以武功爲散騎常侍。齊武帝戲之曰、「貂蟬何如兜鍪」。對曰、「貂蟬生于兜鍪」。外大父頴公罷相建節出帥太原。其詩曰、「兜鍪卻自貂蟬出、敢用前言戲武夫」。

李待制師中以相業自任。嘗帥秦、以事去。其詩曰、「兜鍪不勝任、猶可冠貂蟬」。

【校異】

校一：「卻」の字は、もと「出」の字に作る。津逮秘書本によって改める。

【訓読】

周盤龍 武功を以て散騎常侍と為る。齊の武帝 之に戯れて曰く、「貂蟬は兜鍪ちようせんに何如ぞ」と。対こたへて曰く、「貂蟬は兜鍪より生ず」と。外大父の頴公 相を罷おろめ節を建て、出でて太原に帥すいたり。其の詩に曰く、「兜鍪は却つて貂蟬より出づ、敢へて前言を用ひて武夫に戯れんや」と。李待制師中 相業を以て自ら任ず。嘗て秦に帥たるも、事を以て去る。其の詩に曰く、「兜鍪 任に勝へず、猶ほ貂蟬を冠すべし」と。

【語釈】

- * 周盤龍：南朝齊の武將。晩年にその功績が讃えられ散騎常侍となる。『南齊書』卷二十九、『南史』卷四十六に伝がある。
- * 散騎常侍：皇帝の側に仕え、その過失を諫めたり、政策上の相談にのつたりすることを職務とする官。
- * 齊武帝戲之：『南齊書』卷二十九「周盤龍伝」に以下のようにある。——世祖戲之曰、「卿著貂蟬。何如兜鍪」。盤龍曰、「此貂蟬從兜鍪中出耳」。(世祖 之に戯れて曰く、「卿 貂蟬を著く。兜鍪に何如ぞ」と。盤龍曰く、「此の貂蟬は兜鍪の中より出づるのみ」と。——「何如」は、く比べていかがか、の意。
- * 貂蟬：高位の文官がかぶる冠。貂の尾と蟬の羽が飾りとして施されている。
- * 兜鍪：武官がかぶるかぶと。
- * 外大父頴公：「外大父」は、母方の祖父のこと。「頴公」は、陳師道の母方の祖父、龐籍のこと。北宋・仁宗の信任があつて、參知政事、

同中書門下平章事などの宰相職を勤める。その後、讒言にあい、地方に出て鄆州、永興軍、并州などの知事を歴任。太子大保で致仕し、穎国公に封ぜられた。死後、莊敏と諡され、司空を追贈、侍中を加えられた。『宋史』卷三二一に伝がある。

* 建節：「節」は、君命を受けた安撫使が授けられるしるしの旗。「建節」は、旗を手に執ること。ここでは、地方の安撫使に任命されたことを言う。

* 出帥太原：「帥」は、地方の兵権をつかさどる安撫使の別名。多くは州の知事が兼任した。「太原」は、山西省太原。ここでは、龐籍が并州(河北省保定と山西省太原、大同一帯の地)の知事となったことを言う。

* 「兜鍪卻自」の二句：龐籍の詩は、『全宋詩』卷一六三に収められているが、この二句は未収録である。

* 前言：以前に発せられた言葉。ここでは、周盤龍をからかつた齊の武帝の言葉を指す。

* 李待制師中：第七十五節の【語釈】を参照のこと。

* 相業：宰相としての功業。

* 嘗帥秦：「秦」は地方の名。現在の陝西省のあたり。「帥」は、安撫使のこと。李師中が秦州の安撫使・知事になったことについては、第七十五節の【語釈】を参照。

* 以事去：何らかの事情で任を去ること。西夏を攻めるか、守りに徹するかで、王韶と意見が対立し、王安石が王韶を支持したため、舒州の知事に降格となったことを言う。

* 「兜鍪不勝任」の二句：『全宋詩』卷三九七は、本節を出典として、この二句のみを収める。

【通釈】

南朝齊の周盤龍は、武功によつて散騎常侍となつた。

齊の武帝は彼をからかつて次のように言った。「文官の冠は、武官のかぶとに比べてどうかね」と。答えて言うには、「冠はかぶとから生まれました」と。外祖父の頼公が宰相をやめ、旗を手に執り、太原地方の兵権をつかさどる安撫使に赴任した。その詩に次のように言う。「かぶとが周盤龍の時とは逆に文官の冠から生まれた。その昔、周盤龍をからかった齊の武帝の言葉によつて、武官をからかうことなどどうしてできようか」と。

天章閣待制の李師中は、自らを宰相としての功業をたてる人物だと任じていた。あるとき秦の地方の兵権をつかさどる安撫使に任命されたものの、事情によつてその任を去つた。その詩に次のようにいう。「私にはとてもかぶとをかぶる武官は務まらなかつたが、それでもなお文官の冠ならばかぶることができる」と。

八十三

東坡居惠、廣守月饋酒六壺。吏嘗跌而亡之。坡以詩

謝曰、「不謂青州六從事、翻成烏有一先生」。

【訓読】

東坡 惠に居りしとき、広の守 月に酒六壺を饋る。
吏 嘗て跌きて之を亡ふ。坡 詩を以て謝して曰く、「謂
はざりき 青州の六從事、翻つて烏有の一先生と成るを」
と。

【語釈】

*居惠：「惠」は、惠州（広東省惠州市）。紹聖元年（一〇九四）、宰相となつた章惇（字は質夫）が新法を復活させたため、蘇軾はその年の十月から四年四月まで、この地に左遷されることになつた。

*廣守：広州（広東省広州市）の知事。

*「不謂」の二句：七言律詩「章質夫送酒六壺。書至而酒不達。戲作小詩問之（章質夫 酒六壺を送る。書は至るも酒は達せず。戯れに小詩を作りて之に問ふ）」詩の領聯。「蘇軾詩集」卷三十九では、「不謂」を「豈意」に、「翻成」を「化爲」に作る。

*青州六從事：「青州從事」は、よい酒の異名。『世説新語』術解篇の以下の故事を踏まえる。——桓公有主簿善別酒。有酒輒令先嘗。好者謂青州從事、惡者謂平原督郵。青州有齊郡、平原有鬲泉。從事言到鬲、督郵言在鬲上住。（桓公に主簿の善く酒を別つ有り。酒有れば輒ち先づ嘗めしむ。好き者は青州從事と謂ひ、悪しき者は平原督郵と謂ふ。青州に齊郡有り、平原に鬲泉有り。從事は臍に到るを言ひ、督郵は鬲上に在りて住まるを言ふ。）——青州の「齊郡」の「齊」の字から「臍（へそ、の意）」の字を連想させ、平原の「鬲泉」から「膈（横隔膜、の意）」の字を連想させるといつた、一種の言葉遊びとなつてゐる。よい酒は飲むと臍のあたりまで染み渡るが、悪い酒は飲んで横隔膜のあたりでつかえると言う。ここでは、送られてきた六壺

の酒を「青州従事」と表現し、よい酒であることを言う。「従事」は、本来は官職名。

*鳥有「先生」：「鳥有」は「鳥くんぞ有らんや」と訓読し、「どうしてあろうか。何もない」の意。「鳥有先生」は、前漢・司馬相如の「子虛賦」に登場する人物の一人。ここでは、酒がすっかりなくなつてしまつたことを言う。

【通釈】

蘇軾が惠州に居たとき、広州の知事が毎月六壺の酒を差し入れてくれた。あるとき下級役人がつまずいて酒壺をすべて割つてしまつた。蘇軾はそこで挨拶がてら詩を書いて次のように言つた。「思いも寄らないことに、六人の青州従事が、一人の鳥有先生になつてしまいました」と。

八十四

王旂〔校〕、平甫之子。嘗云、「今語例襲陳言、但能轉移爾」。世稱秦詞「愁如海」爲新奇。不知李國主〔校〕已云「問君能有幾多愁。恰似一江春水向東流」。但以江爲海爾。

【校異】

校一：「旂」の字は、もと「游」の字に作る。津逮本によつて改める。

【訓読】

王旂は、平甫の子なり。嘗て云ふ、「今の語は例ね陳言

を襲ひ、但だ能く転移するのみ」と。世 秦詞の「愁ひは海の如し」を称へて新奇と為す。李國主〔校〕に已に「君に問ふ 能く幾多の愁ひ有りやと。恰も似たり 一江の春水 東に向かひて流るるに」と云ふを知らざるなり。但だ江を以て海と為すのみ。

【語釈】

*平甫：王安国のこと。平甫はその字。王安石の弟。

*陳言：言い古された言葉。

*轉移：言葉を移し換えること。

*秦詞：北宋・秦觀の「千秋歲」詞の一節。末尾の二句に以下のようにある。——春去也、飛紅萬點愁如海〔春 去りぬ、飛紅 万点 愁ひは海の如し〕。——

*李國主：南唐の後主・李煜のこと。詞人として名高い。

*「問君」の二句：李煜の「虞美人」詞の一節。

【通釈】

王旂は王安国の子である。かつて次のように言つた。「今の人の言葉は、おおむね言い古された言葉を踏襲し、ただうまく差し替えているだけにすぎない」と。世間の人々は秦觀の「愁いは海のように」という句を新しくて奇抜な表現だと称えている。しかし、南唐の後主・李煜の詞に「あなたにお尋ねします。いかばかりの愁いを抱えていらつしやるのでしょうか。それはあたかも長江いっぱいに満ち溢れる春の水が東へ向かつて流れていくよう

に、いつまでも尽きることがないので」という句がす
でにあることを知らないのである。秦観はただ「江」を
「海」に差し替えただけなのである。

《附録一》

『四庫全書総目』巻一九五「集部 詩文評類一」『後山詩話』

『後山詩話』一卷 江蘇巡撫採進本

舊本題宋陳師道撰。師道有『後山叢談』、已著録。是書『文獻通
考』作二卷、此本一卷。疑後人合併也。陸游『老學菴筆記』深疑『後
山叢談』及此書、且謂『叢談』或其少作、此書則必非師道所撰。

今考其中於蘇軾・黃庭堅・秦觀、俱有不滿之詞、殊不類師道語。
且謂「蘇軾詞、如教坊雷大使舞。極天下之工、而終非本色」。案蔡
條『鐵圍山叢談』、稱「雷萬慶宣和中以善舞隸教坊」。軾卒於建中
靖國元年六月、師道亦卒於是年十一月。安能預知宣和中有雷大使
借爲譬況。其出於依託、不問可知矣。

至謂「陶潛之詩、切於事情而不文」、謂「韓愈元和聖德詩、於集
中爲最下」。而裴說寄邊衣一首、詩格柔靡、殆類小詞、乃亟稱之、
尤爲未允。其以王建望夫石詩爲顧況作。亦間有舛誤。疑南渡後舊
稟散佚、好事者以意補之耶。

然其謂「詩文寧拙毋巧、寧朴毋華、寧羸毋弱、寧僻毋俗」、又謂
「善爲文者、因事以出奇。江河之行、順下而已。至其觸山赴谷、風

搏物激、然後盡天下之變」。持論間有可取。

其解杜甫同谷歌之黃獨、百舌詩之讒人、解韋應物詩之新橋三百、
駁蘇軾戲馬臺詩之玉鉤白鶴。亦間有考證。流傳既久、固不妨存備
一家爾。

【訓読】

『後山詩話』一卷 江蘇巡撫の採進本

旧本 宋の陳師道の撰と題す。師道に『後山叢談』有り、已に
著録す。是の書、『文獻通考』は二卷に作るも、此の本は一卷なり。
疑ふらくは、後人合併せしならんか、と。陸游の『老學菴筆記』
深く『後山叢談』及び此の書を疑ひ、且つ謂へらく、『叢談』は
或いは其の少作なるも、此の書は則ち必らず師道の撰する所に非
ず」と。

今考ふるに、其の中、蘇軾・黃庭堅・秦觀に於いて、俱に不滿
の詞有るは、殊に師道の語に類せず。且つ「蘇軾の詞は、教坊の
雷大使の舞の如し。天下の工を極むるも、而れども終に本色に非
ず」と謂ふ。案するに、蔡條の『鐵圍山叢談』に、「雷万慶、宣和
中に舞を善くするを以て教坊に隸せらる」と称す。軾は建中靖國
元年六月に卒し、師道も亦た是の年の十一月に卒す。安くんぞ能
く預め宣和中に雷大使有るを知りて、借りて譬況と為さんや。其
の依託より出づるは、問はずして知るべし。

「陶潛の詩は、事情に切なるも文らず」と謂ひ、「韓愈の元和聖
德詩は、集中に於いて最下と爲す」と謂ふに至る。而して裴說の
辺衣を寄するの一首は、詩格 柔靡にして、殆ど小詞に類するも、

乃ち亟かに之を称ふるは、尤も未だ允ならずと為す。其の王建の望夫石の詩を以て顧況の作と為す。亦た間ま舛誤有り。疑ふらくは南渡の後、旧稿 散佚し、好事者 意を以て之を補ふならんか、と。

然れども、其の「詩文は寧ろ拙なるも巧なること母かれ、寧ろ朴なるも華なること母かれ、寧ろ粗なるも弱なること母かれ、寧ろ僻なるも俗なること母かれ」と謂ひ、又た「善く文を為る者は、事に因りて以て奇を出だす。江河の行くは、順下するのみ。其の山に触れ谷に赴き、風 搏ち、物 激するに至りて、然る後に天下の変を尽くす」と謂ふ。持論 間ま取るべき有り。

其の杜甫の同谷歌の黄独、百舌詩の讒人を解し、韋応物詩の新橋三百を解し、蘇軾の戲馬台詩の玉鉤・白鶴を駁す。亦た間ま考証する有り。流伝すること既に久し、固より一家に存備するを妨げざるのみ。

【通釈】

『後山詩話』一卷 江蘇巡撫が採集し進呈したテキスト

ふるいテキストは宋の陳師道の撰と書き記している。陳師道には『後山叢談』という著作があり、すでに著録してある。この著作については、元・馬端臨の『文獻通考』は二巻に作るが、このテキストは一卷である。南宋・陸游は『老學菴筆記』の中で、『後山叢談』とこの著作に深く疑問を抱き、かつまた以下のように評して言う。『後山叢談』はあるいは陳師道の若い頃の作かもしれないが、この著作はきつと陳師道が編集したものであるまい。

と。

今ここで考えてみるに、その中に蘇軾・黄庭堅・秦觀に対して、いずれにも不満の言葉が見えるのは、特に陳師道の言葉としてはふさわしくないように思える。さらに、「蘇軾の詞は、宮廷の音楽所に仕える雷大使の舞のようである。巧みさにおいて天下に名を極めているとはいえず、結局はその道の本来のありようではない」（第四十九節）と評す。南宋・蔡條の『鐵圍山叢談』（卷六）によれば、「雷万慶は、宣和年間（一一一九―一二五）に舞に巧みであることによつて宮中の音楽所に配属された」と言う。蘇軾は建中靖国元年（一一〇二）六月に亡くなつており、陳師道もまたこの年の十一月に亡くなつてゐる。どうしてあらかじめ宣和年間に雷大使がいることを知り、それを借りて比喻にすることができようか。この話がかこつけから出ていることは、問わなくても分かるであらう。

「陶淵明の詩は、現実の社会や生活に密着しているが、ただ美しさに欠けている」（第六十七節）と評し、「韓愈の元和聖徳詩は、彼の詩集の中では最も出来の悪い部類に属する」（第四十三節）とまで評している。また、辺境の夫に衣を寄せることを詠った裴説の詩は、詩の風格が柔弱にすぎ、ほとんど詞のようなものにすぎないものの、なんとそれを称讃しているのは（第六十四節）、最も不適切な批評と言えよう。さらに、王建の望夫石を詠った詩を顧況の作としている（第三節）。このようにしばしば誤りが見られるのである。あるいは宋の政権が南に渡つた後、旧稿が散逸し、愛好家が何らかの意図があつて、これらの話を補つたのであらう

か。

しかし、「詩文は、技巧に走るよりは、むしろ拙劣な方がよい。華美を求めるよりは、むしろ質朴な方がよい。弱々しいよりは、むしろ粗削りな方がよい。通俗的であるよりは、むしろ偏屈な方がよい」(第五十七節)と評し、さらに「上手に文章を書く者は、目にした事物によっておのずと奇抜な表現を生み出すのである。大河の流れはおのずと低い方に向かつていくだけである。山に行き当たり谷に赴き、風に巻き上がり、物にぶつかりあつて、そのようにしてはじめて、さまざまな変化を極めるのである」(第四十七節)と評す。このように、持論にはしばしば取るべきものもある。同谷で作った杜甫の歌に出てくる「黄独」(第六十節)、および百舌詩における「讒人」(第六十一節)を解明し、韋応物の詩に見える「新橋三百」(第六十二節)を解明し、蘇軾の戲馬台で作った詩における「玉鉤」「白鶴」(第七十節)の誤用を指摘している。このようにしばしば的確な考証も見られる。長きにわたって流伝している著作だけに、一家として備えておくことを妨げるものではない。

《附録二》

後山詩話諸本異同

松尾肇子

〔凡例〕

◇ 『後山詩話』については四庫提要にある通り、その成立には疑問が持たれてきた。本訳注稿が底本とした中華書局本『歴代詩話』は『津逮秘書』『適園叢書』によって校訂を加えているが、他にも刊本は多い。ここに諸本における文字の異同を記す。ただし煩を避けて異体字は挙げなかった。また通用字のうち「巳・日」については異文が存する場合にのみ提示することとし、その一々は記さない。

◇ 諸本の略称は以下の通りである。閲覧、複写をご許可くださった各所蔵機関にお礼申し上げる。

〔百〕：百川学海(百部叢書集成所収影宋本)

〔説〕：説郭(影明刊本「卷八十三」所収)

〔一〕：説郭一百二十号(影明刊本「八十二号」所収)

〔五〕：宋五家詩話(明正徳刊本・神戸市立図書館吉川文庫

蔵)

〔稗〕：稗海(明刊清修振鷺堂本・立命館大学蔵)

〔津〕：津逮秘書(影明汲古閣本)

〔四〕：四庫全書(影清刊本)

〔歴〕：歴代詩話(上海文鳳公司石印本・愛知大学小川文庫

蔵

〔適〕：適園叢書（百部叢書集成所収「後山先生集」）

〔螢〕：螢雪軒叢書（高山堂本・筑波大学蔵）

◇ 「後山詩話」 諸本のほか、宋代詩話のうち比較的多数の条を輯録する左記三本を加えた。

〔漁〕：茗溪漁隱叢話（人民大学出版社排印本、一九八二）

〔能〕：能改齋漫録（上海古籍出版社排印本、一九六〇）。な

お、「能（）」の（）内は校訂に記載の別本書名。

〔玉〕：詩人玉屑（上海古籍出版社排印本、一九七八）。なお、

「玉（）」の（）内は校勘記に記載の別本書名および

重複掲載の巻数。

◇ 諸本における条の区分・配列は以下の通りである。くは底本の複数を、＋は二条を、あわせて一条と示していることを示す。

〔百〕：十く十二、四十六四十七、六十五十六十六。五十

九は三条に分ち、後二条は六十三と六十四の間に置く。

〔五〕：十く十二、四十六四十七、六十五十六十六。五十

九は三条に分ち、後二条は六十三と六十四の間に置く。

〔一〕：十く十二、四十六四十七、六十五十六十六。五十

九は三条に分ち、後二条は六十三と六十四の間に置く。

〔稗〕：十く十二、四十六四十七、六十五十六十六。五十

九は三条に分ち、後二条は六十三と六十四の間に置く。

〔四〕：十く十二、四十六四十七、六十五十六十六、六十

八十六十九。五十九は三条に分ち、後二条は六十三と

六十四の間に置く。

〔歴〕：十一く十二、四十六四十七、六十五十六十六、六

十八十六十九。五十九は三条に分ち、後二条は六十三と六十四の間に置く。

◇ 全条を掲載していない諸本の掲載状況および区分は以下の通りである。

〔適〕：七十八、二十五二十六、四十一四十二、五十七

五十八、六十六六十七。

〔説〕：一、二、三、四、五、六、七、八、九、十く十二、

十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二

十一、二十二、二十五、二十九、三十、三十三、三十四、

三十八、三十九、四十、四十三、四十四、四十五、五十四、

六十一、六十二、六十三、六十四、六十五十六十六、六

十八、六十九、七十一、七十四。二十九については「王

荆公」と「司馬温公」とを別条とする。

〔螢〕：十一く十二、四十六四十七、五十七五十八、六

十五十六十六、六十八十六十九。五十九は三条に分ち、

後二条は六十三と六十四の間に置く。

〔漁〕：前集巻一：六十八、巻二：二十二、巻四：六十七、

巻五：六十三（但し「山谷云」として）、巻六：九前半・

六十（但し「山谷云」として）、巻九：九後半・十（魯

直謂）から「孟浩然」へつづく）、巻十：十四十五、巻

十一：四、巻十二：七十一・六十一（但し「山谷云」と

して）、巻十三：二、巻十四：三十三、巻十五：六十九・

三十九、巻十六：十三前半・三十五、巻十七：六、巻十

八：五十・五十一・四十八・六十六・四十三・四十一・四十二、卷二十五：一・七十四、卷二十六：七十十（「魯直謂」から「深也」まで）・七十八・七十九、卷二十八：五十五・五十二・三十二、卷二十九：二十一、卷三十一：八十二、卷三十三：二十七、卷三十五：二十九、卷三十六：十三後半、卷三十七：三十六・三、卷三十八：六十五、卷三十九：六十二（但し「山谷云」として）、卷四十：七十・二十五・二十六・八十三、卷四十一：八十七、卷四十二：二十四・二十八、卷四十七：四十、卷四十八：三十八・三十一、卷四十九：十二・二十・四十九、卷五十：八十四・十九、卷五十一：八十一・不明、卷五十二：八、卷五十三：五十四、卷五十四：七十三、卷五十五：十六、卷五十九：十七・五十六・十八、卷六十：五・七十五・七十七・三十七、

〔能〕：卷三：三、卷五：三十五、卷八：五（詩のみ）、卷十：七（部分）・四十三（缺頭三字）、卷十一：二十六、卷十五：六十二（一部・六（缺末九字））

〔玉〕：卷五：五十七（后山詩話とする）・十二（后山とする）、卷八：八（後半の要旨を程泰之考古編から再引）、卷十一：七十八・八（前半の要旨を復齋漫録から再引）、卷十二：九（杜之詩法韓之文法）以下）十一・十二、卷十四：二、卷十五：三十九・六十六、卷十七：二十七・十三（末一文のみ）・二十九・二十八、卷十八：四十、卷二十：五（后山詩話）、卷二十一：四十九（漁）からの引用。「本色」

まで。）

◇ 詩話の呼称については以下の通りである。

後山居士詩話：〔百・五・一・稗・螢〕

後山詩話：〔説・四・歴・漁〕

陳無己詩話：〔能〕

陳後山詩話・后山詩話・后山：〔玉〕

なお、「太祖」の上に一字分の空格を置くのは〔百・五・稗〕の三本である。

◇ 表の構成は左記の通りである。

【条番号】○訳注稿底本の表記：異文〔この異文を有するテキストの略称〕

【一】○來朝：來〔百・説・一・五・稗・津・四・歴・螢〕。○傳誦：誦傳〔漁〕。○爾：尔〔百〕耳〔適・漁〕。○我不道：吾不道〔百・説・一・五・稗・津・四・適・螢・漁〕。○遂以：以〔百・説・一・五・稗・津・歴・螢・漁〕已〔四〕。○殿上：殿上多〔説上殿〔四〕〕。○吾微時：微時〔百・説・一・五・稗・津・四・歴・螢〕。○華山：華〔百・説・一・五・稗・津・四・歴・螢・漁〕。

【二】○前世：前人〔玉〕。○杜子美：子美〔漁・玉〕。○羞：休〔一〕。○旁：傍〔百・説・一・五・稗・津・四・歴・螢〕。○故謂：謂〔百・説・一・五・稗・津・四・歴・螢〕。○胸肚中泄爾：胸中度世耳〔百・説・一・螢・漁・能・稗・津・四〕胸中度世爾〔歴〕。

【三】○古今：今〔漁〕。○共：其〔説〕承〔能〕。○惟：唯〔百・説・

- 一・五・稗・津」。○劉夢得：夢得〔百・一・五・稗・津・四・歷・蚩〕。○已：已〔百・一・五・稗・津〕。○況〔能〕。○黃叔達：黃叔度〔百・一・五・稗・津・四・歷・蚩〕。○江南有：江南〔能〕。○疑況：況〔說〕。
- 【四】○歐陽永叔：永叔〔漁〕。○蘇子瞻：子瞻〔漁〕。○司馬：司馬遷〔漁〕。○余：予〔說〕。○黃魯直：魯直〔說〕。○嘆：歎〔說〕。五・一・適・蚩・漁〕。
- 【五】○蜀宮：蜀事〔漁〕。○十四：二十〔能〕。○更：寧〔能・玉〔寬永〕〕。○個：箇〔百・五・說・一・稗・蚩〕。○數萬：纔數萬〔漁・玉〕。
- 【六】○韓退之南食詩云：南食詩〔漁〕。韓退之南食詩〔能〕。○山海經云：山海經曰〔適・能〕。○爲：如〔百・說・一・五・稗・津・四・適・蚩・漁〕。
- 【七】○白樂天云：白樂天〔四・歷〕。○燈：鐙〔適〕。
- 【八】○燈：鐙〔適〕。○揚州：揚州〔一・蚩〕。○王平甫：王介甫〔說〕。平甫〔玉〔卷十二〕〕。○牙人語也：牙人話〔玉〔卷十二〕〕。○詩曰：詩云〔說〕。○江：山〔一〕。○多：高〔漁〔原本〕・玉〔卷八〕〕。○余：予〔說〕。○謂分界喉子語也：是分界喉子耳〔玉〔卷八・十二〕〕。
- 【九】○黃魯直云：魯直言〔漁〕。○爾：耳〔前出のみ〕〔稗〕耳〔二箇所とも〕〔百・五・說・一・蚩・漁〕耳〔引用部分の後出のみ〕〔玉〕。○杜之詩法：杜之詩〔玉〕。
- 【十】○黃魯直：魯直〔漁〕。○白樂天云：白樂天〔百・說・一・五・稗・津・蚩〕。○燈：鐙〔適〕。○杜子美云：杜子美〔漁〕。○遊
- 絲：游絲〔說・適〕。○孟浩然云：孟浩然〔漁〕。○撼：動〔百・說・五・稗・津・適・漁〕。○九僧云雲中下蔡邑林際春申君：光涵太虛波動岳陽樓爲雄渾〔適〕。○雲中：雲間〔百・說・一・五・稗・津・四・蚩・漁〕。
- 【十一】○云：曰〔百・一・稗・津・適・玉〕。
- 【十二】○於：于〔說・一・蚩〕。○爾：耳〔漁・玉〔卷五・十二〕〕。○妙爾：妙耳〔說〕。○淵明不：淵明之〔玉〔卷十二〕〕。○不成：無成〔漁・玉〔卷五〕〕。○功：工〔漁〕。○終爲：終〔漁・玉〔卷五〕〕。○樂天：白樂天〔適〕。
- 【十三】○然此老：而公〔說〕。而老〔百・一・五・稗・適・漁〕此老〔津・四〕。○李于：季于〔百・說・一・五・稗・津・四〕李千〔漁〕。○志：墓誌〔適〕。○耶：邪〔百・一・五・稗・津・四・蚩〕。○白傳：白傳〔一・稗・津・四・適〕。○憐：怜〔百・五・稗・津〕。○詩云：詩〔漁〕。○誇：夸〔漁〕。○平生文體：文體〔百・說・一・五・稗・津・四・歷・蚩〕。○暮年：莫年〔百・說・五・稗・津・四・漁〕。○暮年〔一〕。○益工用意益苦：益苦〔百・說・一・五・稗・津・四・歷・蚩〕。○故知：故〔漁・玉〕。
- 【十四】○學釣翁：學釣翁蓋〔漁〕。
- 【十五】○閭闔開宮殿：宮殿開閭闔〔百・說・一・五・稗・津・四・歷・蚩・漁〕。○取作：取〔適〕。
- 【十六】○當筵：當年〔說〕。○郎當：琅璫〔適・漁〕。
- 【十七】○後王：王〔適〕。○取：即〔百・說・一・五・稗・津・四・歷・蚩・漁〕。
- 【十八】○武才人：武王〔說〕。武人〔百・一・五・稗・津・四・歷・

- 蛩。○慶壽宮・度宮〔百・説〕慶宮〔一・五・稗・津・四・歴・蛩〕。○作詞・作詩〔一〕。
- 【十九】○宋玉・宋玉〔稗〕。○神・神女〔適・漁〕。○遇・過〔百・一〕。○襄・兩〔適・漁〕。○余・予〔説〕。
- 【二十】○左杜・老杜〔二箇所とも〕〔百・説・一・五・津・四・歴・蛩・漁〕老杜・杜老〔稗〕。○後韓・韓〔百・五・一・適・蛩・漁〕。○而爲・而由〔歴〕。
- 【二十一】諸本異同なし。
- 【二十二】○余・予〔説〕。○文・文章〔説〕。○華瞻・華而瞻〔説〕。
- 【二十三】○云・曰〔適〕。○曾魯公・魯公〔適〕。
- 【二十四】○而・杜〔適〕。○易新・新易〔適〕。
- 【二十五】○丞・求〔説〕。○使・使〔百・説・一・適・漁〕。
- 【二十六】○假山・假山曰〔百・一・稗・適・蛩・漁・能〕。○之・公〔能〕。
- 【二十七】○魯直・黃魯直〔適〕。○一川花・一川花謂包含數箇意〔玉〕。○二謝・三謝〔玉〕。○于・於〔百・一・五・稗・津・適・蛩・漁・玉〕。○爾・耳〔漁・玉〕。
- 【二十八】○慎・謹〔漁・玉〕。○于・於〔百・五・適・蛩・漁・玉〕。
- 【二十九】○王荊公・荊公〔漁・玉〕。○爲定武・爲武定〔漁〕與定武〔玉〔嘉靖〕〕。○而公・公〔漁〕而於公〔玉〕。○嘗會・常會〔説・漁〕。○躡牆・躡垣〔適・漁・玉〕。○閒・閑〔百・説・一・五・稗・津・四・適・蛩・漁・玉〕。○牀・床〔説・一・歴・蛩・漁・玉〕。○遊仙・游仙〔百・稗・津・四・漁〕遊僊〔五・一・蛩〕。○又杭・杭〔玉〕。○榜第・榜第〔百・五・一・稗・蛩・漁〕。
- 裏・讓〔百・五・説・一・稗・適・蛩・漁・玉〔寛永・嘉靖〕〕。○爲儒・儒爲〔説〕。○著・着〔百・一・五・稗・津・四・漁〕。○荷衣・青衣〔説〕。○偃他・倚他〔玉〕。○采得・採得〔百・説・五・稗・津・四・蛩・漁・玉〕。
- 【三十】○外學・爲外學〔説〕。○幕・宴〔適〕。
- 【三十一】○黃亞夫庶・黃庶〔漁〕。○謝師厚景初・謝景初〔漁〕。○婿也・婿也〔一〕婿〔漁〕。○于・於〔三箇所〕〔百・五・一・四・適・蛩・漁〕於〔第二の箇所のみ〕〔稗〕於〔第二第三の箇所〕〔津〕。○爾・耳〔漁〕。
- 【三十二】○有詩・有〔漁〕。○著・着〔百・一・五・稗・津・蛩・漁〕。○燈・燈〔適〕。
- 【三十三】○世稱杜牧・杜牧云〔漁〕。○爲警絶・最爲警絶〔漁〕。○才・纔〔説・漁〕。○曰・云〔漁〕。
- 【三十四】○牀・床〔百・説・稗・津・四・歴〕。○溪・谿〔適〕。
- 【三十五】○永陽・滁陽〔能〕。○取・請〔百・五・一・稗・適・蛩・漁・能〕。○杜正色・正色〔適・漁・能〕。○杜置酒・彬置酒〔適・漁・能〕。○微・漸〔能〕。○暮・幕〔一〕莫〔百・五・稗・津・四・漁〕。○座・坐〔百・五・一・稗・津・四・適・蛩・漁〕。
- 【三十六】○著・着〔百〕。○捲・卷〔百・五・一・適・蛩〕。○墮・隨風〔適〕。○誦之・誦云〔津・四・蛩〕云〔歴〕。○號張三影・張三影〔百・一・五・稗・津・四・歴・蛩〕。○朦・蒙〔百・五・一〕。○澹・淡〔適・漁〕。
- 【三十七】諸本異同なし。
- 【三十八】○惟・唯〔百・一・五・稗・津・四・蛩〕。○萬事・萬

- 慮〔説〕。○才：纔〔説・五・一・蚩〕。○更：莫〔説・漁〕。
- 【三十九】○孟浩然之詩：浩然詩〔漁・玉〕。○爾：耳〔漁・玉〕。
- 【四十】○魯直乞猫詩云：乞猫詩〔漁・玉〕。○甗：瓮〔百・稗・津・四・玉〕。○銜：御〔百・五・稗・津・蚩・玉〕。○啣〔歴〕。○滑稽：滑〔説・一・五・稗・津・四・歴・蚩〕。
- 【四十一】○龍圖孫：孫〔漁〕。
- 【四十二】○諸本異同なし。
- 【四十三】○于：於〔百・五・稗・津・四・適・漁〕。
- 【四十四】○文事：文士〔百・説・一・五・稗・津・四・歴・蚩〕。
- 【四十五】○諸本異同なし。
- 【四十六】○其：其爲〔適〕。
- 【四十七】○揚：楊〔一・稗・津・適・蚩〕。○惟：唯〔百・五・一・稗・津・四・蚩〕。
- 【四十八】○志：誌〔適〕。墓誌〔漁〕。○于：於〔百・五・適・漁〕。○惟：唯〔一・四・蚩〕。
- 【四十九】○惟：唯〔百・一・五・稗・津・四・蚩〕。
- 【五十】○韓退之：退之〔漁〕。○析：柝〔稗・津・四〕。○曾子固：曾子〔百・一・五・稗・津・四・蚩〕。○子曾子〔適〕。○波濤：濤波〔百・一・五・稗・津・四・適・蚩・漁〕。○世：世蓋〔適〕。
- 【五十一】○爾：耳〔三箇所とも〕〔漁〕。○刀筆：筆力〔漁〕。○又：文〔百〕。
- 【五十二】○于：於〔百・五・一・四・適・蚩・漁〕。○表：表曰〔適〕。○六十三：六十一〔稗〕。○八十：年八十〔百・五・一・適・蚩・漁〕。
- 【五十三】○鄰：隣〔百・五・津・四・歴・漁〕。○論：喻〔漁〕。○召胥魁問之：召胥〔百・一・五・稗・津・四・歴・蚩〕。○十四邪：十四耶〔百・五・一・稗・四・蚩〕。○癡邪：癡耶〔適〕。○長公：蘇長公〔適・漁〕。
- 【五十四】○惟：唯〔百・一・五・稗・津・四・蚩〕。
- 【五十五】○范文正公：文正〔漁〕。○鏘：硯〔漁〕。
- 【五十六】○遊：游〔百・稗・津・四・蚩〕。○仁宗頗：宋仁宗頗〔漁〕。○對酒：對〔百・一・稗・津・四・蚩〕。○侍從：侍妓〔適・漁〕。○仁宗聞：後仁宗〔漁〕。○其詞：此詞〔漁〕。
- 【五十七】○母：母〔一・稗・津・四〕無〔玉〕。○樸：朴〔五・稗・津・四・歴・適・蚩・玉〕。○粗：麤〔適〕。
- 【五十八】○子桓：子恒〔津〕。魏文〔適〕。○其能：其〔適〕。
- 【五十九】○書：書曰〔適〕。○才思：材思〔百・五・稗・津・四・蚩〕。○史書：史〔百・一・五・稗・津・四・歴・蚩〕。○縱酒：縱〔百・一・稗・津・四・歴・蚩〕。○故詩人：故〔百・一・五・稗・津・四・歴・蚩〕。○漫：謾〔適〕。○鳳凰：鳳〔百・一・五・稗・津・四・歴・蚩〕。
- 【六十】○老杜云：〔缺文〕〔漁〕。○託：托〔稗・津・四〕。○掩脛：揜脛〔漁〕。○黃精：王〔一〕。○余考：予攷〔百・五・一・適・蚩〕。○予考〔稗・津・四・漁〕。○余求：予求〔漁〕。○煮：蒸煮〔漁〕。○魁云：魁〔漁〕。なお、〔漁（前集卷六）〕は「山谷云」としてこの条を引く。
- 【六十二】○余：予〔説〕。○周官：周書〔百・一・五・稗・津・四・適・蚩・漁〕。○乃：迺〔百・説・一・五・稗・津・四・適・蚩〕。

○老杜百舌：百舌詩〔漁〕。なお、〔漁（前集卷十二）〕は「山谷云」としてこの条を引く。

【六十二】○才：纒〔五・説・一・螢〕猶〔漁〕。○亦：色〔漁〕。

○余：予〔説〕。○往：往時〔漁〕。○以爲蓋用：以爲〔漁〕。○甘：柑〔適〕。○枚：枝〔能〕。○未：不〔漁〕。なお、〔漁（前集卷三十九）〕は「山谷云」としてこの条を引く。

【六十三】○余：予〔説〕。○如張樂：如黃帝張樂〔漁〕。○于：於〔百・一・五・稗・津・四・漁〕。○正：政〔漁〕。なお、〔漁（前集卷五）〕は「山谷云」としてこの条を引く。

【六十四】○員外郎：員外〔適〕。○閑階：閑階〔津・四〕閑階〔歴〕。○祇：祇〔百・説・一・五・歴・適〕祇〔稗・津・四・螢〕。○懶：懶〔適〕。○金針：銀鍼〔適〕。○勻：句〔百〕。○託：托〔稗・津・四〕。○總：摠〔百・一・稗〕。

【六十五】○世語：世説〔説〕。○曾子固：曾子開〔百・一・五・稗・津・四・歴・螢〕。○短於韻語：魯直短於散語蘇子瞻詞如詩：（缺文）〔百・説・一・五・稗・津・四・歴・螢〕。

【六十六】○元：無〔稗・津〕。

【六十七】○鮑照：鮑昭〔適〕。

【六十八】○楚詞：楚辭〔説〕。○知：如〔百・一・稗・津・四・歴・適・螢・漁〕。○效風：效〔百・一・五〕。○最後：最後者〔適〕。

【六十九】○於：于〔百・説・五・適・螢〕。

【七十】○嘗：常〔漁〕。○下：一〔百・一・五・稗・津・四・歴・螢〕。○鶴：雀〔稗〕。○以白鶴：以白雀〔歴〕。

【七十一】○常：嘗〔適〕。○杜子美詩云：子美詩〔漁〕。

【七十二】○於：于〔百・五・適・螢〕。○嘗遊：常遊〔百〕常游〔一・五・稗・津・四〕嘗游〔螢〕。○歴：曆〔百・稗〕。○氏：字〔百・一・五・稗・津・適・螢〕。

【七十三】○舉國：方輿舉國〔百・一・五・稗・適・螢・漁〕入輿舉國〔津・四〕。○于：於〔稗・津・適・四・漁〕。○三都谷：三都谷口〔適〕。○遍：徧〔百・一・五・稗・津・適・四・漁〕。

【七十四】○太祖：太祖〔冒頭のみ〕〔螢〕。○夜幸：幸〔漁〕。○賦詩：使賦詩〔説〕。○請韻：盧請韻〔説〕。○萬年：萬年時〔一〕。○清光：春光〔説〕。○坐間：坐間〔適〕。

【七十五】○陝西：陝西〔稗・津・四〕。○犬戎：大□（二字空格）〔一〕。

【七十六】○願：顧〔百・五・一・稗・適〕。

【七十七】○龍靚：靚靚〔漁〕。○年來：年年〔津・四〕。○于：於〔漁〕。○與胡而：而〔百・一・五・稗・津・四・歴・螢・漁〕。

○子野：野〔適〕。○于：於〔百・五・一・適・螢〕。

【七十八】○金玉珠璧：金璧珠碧〔漁〕金玉珠碧〔玉〕。○至寶丹：至寶丹也〔適・漁・玉〕。

【七十九】○未：求〔適〕。

【八十】○耳：爾〔適〕。○前：全〔稗・津・四・歴〕。○老杜：而老杜〔適・漁〕。

【八十一】○而得句：得句〔漁〕。○過林：青林〔漁（鈔本）〕。○老杜：而杜〔適〕。

【八十二】○生于：生於〔稗・百・五・適〕。○出帥：出帥〔百・五・四〕。○卻自：出自〔歴〕。○待制：待制〔稗・津・四〕。

【八十三】○饋：餽〔百・一・五・稗・津・四・蚩・漁〕。
【八十四】○王旂：王游〔稗・津・四・歴・蚩〕航〔漁〕。○〔爾
・耳〔漁〕。○不知：不如〔百・一・稗・四〕。

了